

# 文革新世代と今の若者

● 放 眼 日 中



福建省に2週間、行ってきた。福建省は歴史的にも日本との関係が深く、近年も日本に多くの留学生を送り出した地である。当然、日本への関心も他省よりは強く、日本に対する認知度は格段に高い。そんな彼らからよく聞かれたのは「最近、日本人は中国人を嫌っているというが本当なのか」ということ。彼らにとって、「自分たちが嫌われている」のは、とても気になる問題だという。それは何となく、台湾人の年配世代の感覚に近いものを感じた。台湾と福建は地理的に近いだけでなく、その気質も近いということだろうか。

「決して個人を嫌っているわけではないが、あの集団になった観光客が、けたたましく押し寄せてくる」と、日本人としては残念ながら、いかなるものかと思ってしまう」と答えてみる。すると「あれは文革新世代の、知識のない人々が中心の行動であり、同じ中国人とはいっても、われわれとは別人種だから、そのところを理解してほしい」と訴えられた。まるで「同じ中国人ではない」と言っているかのようなフレーズに、少なからずショックを覚えた。

彼の説明によれば「文化大革命では、一部の知識青年が運動を展開したが、実際に暴力行為、破壊行為を行った多くの若者は勉強などあまりしなかったやつらであり、社会への不満を背景に、ただ、闇雲に行動した」のだという。その文革新世代から今年はずいぶん50年。その時、若者だった人々は、今や60代。一時的には社会を席巻したが、その後の改革開放時代には、また、社会の底辺に沈んでいき、工場労働者や農民にな

った。その彼らも定年退職し、一部が団体旅行で海外へ出るようになった、というのがだ。これはちょっと極端な話であり、また、個人的な体験なども大きく影響している。一概に頷くわけにはいかないが、確かに一部中国人の行動パターンに、「一方的、感情的」など、文革新時代において感じなくもない。また、この年代の人々に共通の「焦燥感」とでもいうべき、物事に対する焦りといら立ちを感じるものが多くある。別のある中国人は、最近の流行言葉として「坏人老了(悪い人が年を取った)」という言い方を紹介してくれた。中国国内の旅行でも、列に割り込む、大声で話すといった文革新世代に対し、若者が陰口をたたき、いや、最近はおからさまに声を出してその行動をたしなめる動きを目にするようになってきた。中国では、明確な格差が生まれ、社会的な不満がまん延しており、人々はお互いにも見えない。求めていくように見える。

現在の10代、20代、特に、農村部の若者も強烈な格差を体感しているといわれている。過去に訪れた農村家庭では、子どもが親に暴力を振るい、家を飛び出したケースも見てきた。また、親が出稼ぎに行き、祖母などによつて育てられるケースも多く、心理的に安定しない者が多いとの話もある。彼らがこの不満を社会に持ち出した時、それは危険な兆候となり、最終的には国内騒乱のよ



コラムニスト・アジアウォッチャー  
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。